



Title	高岡先生さようなら
Author(s)	井元, 秀剛
Citation	Gallia. 2021, 60, p. 111-112
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79400
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

高岡先生さようなら

井元 秀剛

高岡先生の訃報を信じられない思いで聞いた。私にとって高岡先生はずっと頼りになる父親のような存在だった。私が阪大に赴任したのは1993年の秋からで、94年が事実上最初の年で、その年度に大高先生と岡野先生が退官なされ、それ以来高岡先生がフランス語教室の最年長、私が最年少という関係が先生が退職なさるまで続いたのである。私がフランス語教育講座の最年少の座を引き渡したのはつい最近のことだから、私の中では高岡先生にかわいがっていただいた感じがずっと体の中にしみこんでいる。とにかく先生は優しかった。いつもにこやかで、高岡先生といえいつも微笑んでいらっしゃる姿が目浮かぶ。

職場で一番頼れる存在であった、そんな関係から公私にわたってお世話になった。今では同僚の間でお互いの家を行き来するような機会はほとんどなくなってしまったが、先生のお宅へは何度もお伺いした記憶がある。私が独身の頃は「誰かいい人いませんか」などと話していたので、教え子を紹介していただいたり、意中の人に気持ちをそれとなく聞いていただいたり、そんなことまでしていただいた。そんな関係なので、最初の結婚の時の仲人も自然とお願いすることになった。新妻と共にうかがって家庭生活を進める上でのアドバイスをご夫妻にいただいたことなどを今では懐かしく思い出す。そしてまた偶々当時、東京にいた父とご子息とが同じ職場にいて、私より先にご子息と知り合いになっていたこともあり、つきあいは文字通り家族ぐるみであった。私が盲腸で入院していたときも奥様と二人でお見舞に来ていただいたし、何かとお世話になった。

そんな先生との交流の中で知ったのは先生の幅広い教養と多方面の才覚である。ご専門の文学は言うに及ばず、私が知らなかった言語に関するお話も聞かせていただいたし、音楽、工芸、歴史と先生と話しているとあらゆる領域に話が広がっていった。ご自宅には家具や調度品など夫人はだしの手作りの品がいくつもある。最後にお訪ねした頃はフルートに夢中になっておられていて、あれはどうなったのだろうと今では思ってしまう。先生の演奏を一度お聴きしたかったと返す返すも残念である。

先生は融和の人で、教授会などで紛糾することがあっても間にたたれて対立の中をとりもったりしておられた。ドイツ語のH先生なんか、強烈なキャラクターで敵も多かったが、高岡先生にはべったりで、ずいぶんとだめてもらったりしたのではないかな。私ももめごとの時に先生に相談をもちかけたことがある。先生はちょっとおっちょこちょいなところもあって、車の鍵をよく車内にお忘れになる。前述した私の入院中のお見舞いの時も2回ほど来ていただいたのだが、一度

はそんなわけで帰りは電車だったし、結婚式の時もそうだった。それでもけろっと笑っておられるから本当に皆から慕われた。退職なさるときも本当にいろいろな集まりで送別会が行われるので、何度も送別の辞を聞いたような気がする。今はコロナ渦で送別会なども自粛だから、そんなことも懐かしいし、本当に先生がいらしたころは楽しかったなあと思う。先生、安らかに眠りください。

(大阪大学言語文化研究科教授)